

フリードリヒ・シュライエルマッハー

研究の現状と方法論的諸問題

The Current Situation of the Study on Friedrich Schleiermacher and Some Methodological Issues

水谷 誠

Makoto Mizutani

キーワード

シュライエルマッハー、批評版全集(KGA)、シュライエルマッハー協会、弁証法講義、ハンス-ヨアキム・ビルクナー、ウルリヒ・バルト、ハレ・ヴィッテンベルク・マルチン・ルター大学

KEY WORDS

Schleiermacher, Kritische Gesamtausgabe(KGA), Schleiermacher-Society, Dialektik-lecture, Hans-Joachim Birkner, Ulrich Barth, Martin-Luther University Halle/Wittenberg

要旨

シュライエルマッハー研究は、1980年から始まった批評版全集の刊行が進展するに連れて活発さを増している。その先導役を果たしているのは国際シュライエルマッハー協会であり、定期的な国際学会を開催することでこの傾向を促している。本論文では、シュライエルマッハー研究の最近の動向を批評版全集の編纂方針とその実際の内容を通して示す。さらに、公刊物、講義ノートなどの多様な姿を見せるテキストを取り扱う際の原則を明らかにするとともに、学一般と神学の関係、神学各部門の相互関係に注意を促し、シュライエルマッハー研究を方法論的に整備したビルクナーの業績を案内する。

SUMMARY

Study on Friedrich Schleiermacher has been revitalized as the publication of the critical

edition of his collected works, that started in 1980, progresses. The International Schleiermacher Society is playing the leading role and intensifying this trend by regularly organizing various international meetings. This paper depicts the recent trend of the study on Schleiermacher by analyzing the editorial guidelines and actual processes of the collected works. It further discusses the achievement of Hans-Joachim Birkner who established the principles for dealing with Schleiermacher's texts in the forms of publications, lecture notes and other materials and articulated the methodological issues by clarifying the interrelation between theology and other disciplines and among various branches of theology.

はじめに

20世紀後半期のドイツのプロテスタント・キリスト教神学は、啓蒙に始まり19世紀に全面展開した神学とそれが提起した諸問題を再度捉えなおそうとする傾向を示してきた。19世紀の、とりわけ「学術的」(wissenschaftlich)あるいは「大学の」(akademisch)と標榜するプロテスタント神学は、ドイツ啓蒙と敬虔主義によるプロテスタント正統主義神学への批判、ならびに近代的な個の意識の自覚などを背景としつつ、イマヌエル・カントの認識批判以降、神学の成立根拠を人間の信仰経験の次元に求め、必然的に宗教と人間の営みが徹底して歴史的であること、神学的作業が一般諸学と深く関係づけられることを強く意識してきた。20世紀前半期の、啓示と神のことばにその学的根拠を求める神学が主流になって以来目立たないものになってしまったこの問題意識は、しかし、神学の世界に消え去り難い刻印を残しており、20世紀後半には諸学協働の学際的志向性とあいまって再度前面に現れ出てますます先鋭に自覚されるようになってきた。いくつかの例を示せば、1981年には、19世紀から20世紀への変わり目、すなわち弁証法神学勃興の直前に活動し、歴史主義やキリスト教の絶対性他の諸問題に鋭い問題提起を行ったエルンスト・トレルチの業績の再評価を課題として彼の名前を冠した学術協会が設立された¹。また1993年には、近代的歴史意識の環境下に営まれてきた啓蒙以降のキリスト教神学、キリスト教諸教会、諸信仰運動の学際的研究を課題とした『近代神学史雑誌』(ベルリン/ニューヨーク)が発刊され、神学、宗教学、歴史学、哲学を始めとする精神科学一般の研究成果を公にすることが目論まれることになった²。そしていわゆる「近代プロテスタント神学の父」、F・D・E・シュライエルマッハー(1768-1834)が構築した、宗教と文化を包括する視点を持った学際的、総合的な学への関心は、個別神学の領域をはるかに超え出て広まっている。本論文では、このシュライエルマッハーに関

する研究の現状を、主として、彼の著作他の資料とその取り扱いの面から、そして神学的シュライエルマッハー研究の方法論の面から取り扱う。

1 シュライエルマッハー協会と新版全集

1996年9月19日にハレ・ヴィッテンベルク・マルチン・ルター大学神学部組織神学研究所を事務局として「シュライエルマッハー協会」が設立された³。このザーレ河畔にある大学の神学部は、シュライエルマッハーがその時代の主潮であったドイツ啓蒙の精神を摂取するために学生として初めて学んだところであると同時に、神学部教授として招聘を受けて初めて講壇に立ったところでもある。ハレというゆかりの地に設立されたこの学術協会は、近・現代のプロテスタント神学に巨大な影響を与えたキリスト教思想家シュライエルマッハーの世界を21世紀を視野に入れた国際的、学際的共同研究を通じて解明を進めることを目指している。

この協会は1999年3月14日から17日にかけて、ハレにある فرانケ財団の施設を会場にして、『宗教論』第一版出版200年を記念した最初の国際学会を開催した。この『宗教論』をめぐる会議は、1. 哲学と神学の啓蒙、2. ロマン主義とイデアリズム、3. 宗教理論と神学、4. 倫理学と文化理論、という四つの部門を設けて研究発表、討議をなした。これらのテーマが示しているのは、啓蒙、ロマン主義、イデアリズムという精神環境下における『宗教論』の意義と独自性を宗教、神学、倫理、文化という文脈で捉えつつ、『宗教論』を含めたその精神環境自体が現在の精神世界に対して有している範例的意義を学際的、総合的に討究しようとしていることである⁴。このハレでの学術大会開催時に協会は総会を開催し、ハレ大学のウルリヒ・バルト (Ulrich Barth, 組織神学) を正式に会長として選出した。そして4年に一度の大規模な国際学会の開催、その間隙をぬって若い研究者の課題やアクチュアルな課題を取り扱うコロキウムを開催することを申し合わせた。コロキウムはこれまで3回にわたって「文化理論」(Kulturtheorie) や「解釈学」(Hermeneutik) を主題にして開催されている⁵。

このシュライエルマッハー協会会長となったバルトは、長らく待たれていた新版のシュライエルマッハー全集 (Kritische Gesamtausgabe. 以下 KGA と略称) の編纂作業が結実して1980年に最初に刊行された『信仰論』第1版をめぐる編集にキール大学神学部シュライエルマッハー研究所で携わった研究者である⁶。この『信仰論』の第2版 (1830/31年に2分冊で刊行) は、シュライエルマッハー没後に出された旧版全集 (Sämtliche Werke. 以下 SW と略記) に組み込まれ、さらに1970年にマルチン・

レーデカー (Martin Redeker) による校訂版まで繰り返し出版されてきた。しかしそれとは異なり、第1版は1821/22年に出版された後シュライエルマッハー存命中の1828年に増刷されてからはSWにも収録されず今日まで長らく入手困難な状態が続いてきたものであり、シュライエルマッハー教義学の体系的研究を志す者には待望の刊行であった。この『信仰論』第1版はヘルマン・パイター (Hermann Peiter) によって校訂され2分冊で刊行された (KGA, I, 7/1-2)。バルトはこの第1版のテキスト理解を促進する上で必須といえる資料をこの巻の第3分冊としてまとめて1984年に刊行した⁷。すなわち、この第1版刊行以後にこの書物に対して沸き起こった批評に反応してシュライエルマッハー自身が書き留め続けたノートや、シュライエルマッハーが言及し当時の人々にとっても自明のものであったが、現代の我々にはもはや馴染みの薄いものになってしまった当時の種々の著述類から抽出された資料がこの分冊に収録されたのである。KGAはこのように今日まで入手困難となっていたシュライエルマッハーの著作類の刊行を優先するという方針を採用しており、それに従って『信仰論』第1版に続いて1984年にはギュンター・メッケンシュトック (Günter Meckenstock) 校訂による青年期の未刊行の諸論文 (1787年から1801年まで) を収録した巻が引き続いて出版された⁸。周知のように1870年にヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey) が著しその後のシュライエルマッハー研究に強い影響を与えた『シュライエルマッハーの生涯』の付録には、それら青年期のシュライエルマッハーの論文類が部分的、要約的に掲載されていた。しかしそのダイジェストはディルタイの視点に基づく独自のものであり、その全貌が露わになることが期待されていたのである⁹。

2 シュライエルマッハー全集 (SW) とその問題

すでに言及したように、新版全集の刊行は1980年から開始され、入手困難と思われるシュライエルマッハー著作類が先行することになった。ここでは、そのKGA成立の前史としてのSW (旧版全集) とその問題を案内する。

シュライエルマッハーの著作全集の出版は、1834年に彼が没した後直ちにシュライエルマッハーと親交を結んでいたゲオルク・ライマー (Georg Reimer) 主催の出版社で企画された。これは神学的著作、説教、哲学的著作の三つの部門に分類されていた。そしてその企画開始の年1834年には早くも第2部門 (説教) の第1巻、第2巻が刊行された。翌年の1835年にはヨナス (Ludwig Jonas, 1797-1859) の編集によってベルリン学術アカデミーでの講演を収めた第3部門 (哲学) の第3巻が出版された。

このヨナスは、当時ベルリンのニコライ教会牧師を務め、シュライエルマッハーの存命中に、彼の信頼する弟子として「キリスト教倫理論」「弁証法」「使徒言行録」の原稿を託され、その完成出版を委ねられた人物である。この巻に掲載されたヨナスの序言には、ヨナスを含めたシュライエルマッハーを敬愛する人々、友人、弟子たちとして11名の編集作業従事者の氏名が記載されている。この全集は、当初に迅速になされた出版実績を見ても分かるように最初の計画では数年のうちに完成されるということであった¹⁰。

しかし結果的にこの全集は数年どころか30年を超える歳月を経てようやく完結することになる。計31冊の全集は、刊行が始まった1834年から最初の5年間に15巻が出されたが、その後の10年間は11巻に留まり、残りの5巻は1849年から1864年の16年の間に単発的に出版されたのであった。最終的には、第1部門は全13巻、第2部門は全10巻、第3部門は全9巻の構成となったが、そのうちの第1部門は第9巻、第10巻が欠番となり、また第3部門の第4巻は2分冊となって登場した。ただしこの第4巻第1分冊は『哲学史』、第2分冊は『弁証法講義』であり、必ずしも内容的に両者に直接の関連があって同じ巻に組み込まれたわけではない¹¹。

このSWは、その後のシュライエルマッハー研究に重要な貢献をしたことは否定し得ない事実であるが、にもかかわらず刊行期間中から種々の問題点が指摘されてきた¹²。第一に、分類の問題がある。全集は神学、説教、哲学の三部門構成となっている。この分類は、生涯後半期のベルリン時代にシュライエルマッハーが引き受けた三つの職務、すなわちベルリン大学神学部教授、三位一体教会牧師(Dreifaltigkeitskirche)、プロイセン学術アカデミーの「哲学・歴史」部門の会員(1814年からこのセクションの責任者)に対応している。ちなみにシュライエルマッハーはこのアカデミー会員としての権利を行使してベルリン大学哲学部でも講義を担当した。しかし、これは神学と哲学というテーマ別の分類と、「説教」といういわば一つの文学類型を集めた分類とを混在させており、編集の原則は一貫していない。また、シュライエルマッハーの全著述活動はその構造上神学か哲学かという図式に単純に分類しにくい性質を持っている。そのために彼の作品の中には、このいずれかに押し込めるにはかなりの無理を強いられるものがある。典型的な例は、神学的見地でその性格をめぐって論争がなされてきた第1部門第1巻収録の『宗教論』である。この論争ではこの書物が神学的著作であるのか、哲学的著作であるのかいずれかという論題が大きな比重を占めてきた。しかしこのような二者択一的なアプローチはシュライエルマッハーの神学的・哲学的体系自体の論理を適切に表現するものとは言い難く、論者自体の神学理解をシュライエルマッハーの宗教理論に押しつけるものであったのである。

第二に、SWではシュライエルマッハーの存命中に出版された著作の場合、その最

終版を収録するという原則が立てられた。その結果『信仰論』第1版は長らく出版されず、すでに言及したとおりこの重厚な教義学的著作は専ら第2版を基にして論じられることになった。しかしこれではシュライエルマッハーの思想の歴史的発展の過程、思想的変遷の背景を辿ることが困難になる。このような原則の持つ不備に伴って、後になってから種々の個別の版が登場し、SWの欠陥を補うとともにテキスト校訂上の質的改善が図られてきた。『宗教論』の場合、1879年にはピュンヤー(Bernhard Pünjer)が各版の比較参照版を出し、これによって初版を見ることが可能になり、さらに各版の異同をも参照することができるようになった。この、第一版を主にしてそれと異同のある第2版以降の箇所を隔字体にして脚注に記したこのテキストは、しかし、きわめて読みにくいものであった¹³。また、第一版刊行100年後の1899年に、オットー(Rudolf Otto)は詳細な注をつけた第一版の校訂版を出版した。それ以降『宗教論』については第2版が出回った『信仰論』とは異なり、その第1版にとりわけ関心が集中し、20世紀前半の神学におけるシュライエルマッハー像を強く規定するものとなった。『独白録』は、1902年にシーレ(Friedrich Michael Schiele)によって1800年出版の『独白録』第1版が校訂出版された。これはさらにムールルト(Hermann Mulert)によって1914年に増補されている。シュライエルマッハーの神学体系を簡潔に扱った『神学通論』は、ショルツ(Heinrich Scholz)によって校訂された。それは第2版をテキストにしてそれに対応する第1版のテキストを脚注に掲載したものである。

第三の問題点は未収録の著述が多くあったことである。とりわけ彼の思想の究明に不可欠である伝記的な資料、書簡類の掲載をSWは考慮していなかった。この欠陥を補うためにすでに1858年に2巻本でシュライエルマッハーの係累の手で編集された書簡集が出版された。これは、後にヨナス、ディルタイの手によってさらに2巻の増補がなされ、つい最近まで基本的な資料として利用されてきた¹⁴。その他に、現在もなお意義を失わないプラトンのドイツ語訳、英国の説教者の著作のドイツ語訳などの翻訳関係の欠如など、要するにシュライエルマッハーの多様な著述活動の全貌を視野に入れた編集がなされなかったと言えるのである。しかしとりわけ、全集編纂作業で重荷になったと思えるのは彼の講義の編集であった。そこでは、『神学通論』の展開とも言える「神学諸科解題」、「信条学」関係の講義、さらに新約聖書釈義関係の資料のかなりの部分が割愛されただけでなく、全集に掲載されたものそれぞれの出来ばえが個々に多様であり決定版としての意味合いでは疑問に付されたものが多かったのである。これについては次節に案内する。

3 シュライエルマッハーの講義原稿

シュライエルマッハーは存命中に上に言及したものを含めて数多くの著作を公にした。しかし同時に豊穡で魅力的な彼の思索の成果を完成させて著作にまとめることの少ない学者でもあった。パネンベルクが指摘するように、公刊された著作類は、海上に突き出ている氷山の一角にすぎず、水面下には膨大な体系的思索の塊が隠されている¹⁵。SWの第1部門(神学)と第3部門(哲学)のうちの過半を占める13巻は未公開の講義ノート類を編集したものである。それらの講義関係の遺稿類を考慮することなしにはシュライエルマッハー神学の全体像は見えてこない。

ただし、この公刊されるにいたらなかった講義類は、内容の重要性にもかかわらず、その整理にはきわめて煩雑な作業が必要とされる。彼はその生涯の後半、2年半あまりをハレで、それ以降は没するまでベルリンで大学神学部教授として過ごした。その期間は四半世紀を超えるものであり、その間に講義を毎学期2科目から3科目担当し、合計では25種類を超えるテーマを扱った¹⁶。それらの講義は神学部で講義した諸科目、その中にまとめて存在する新約釈義関係の科目群、さらに哲学部で講義した諸科目の三つにおおむね分かれている。それらは、同じテーマで繰り返しなされたが、その間に内容の発展や成熟が必然的に見られる。それらをどのような原則と尺度のもとで編集しなおすのかはSW以来の課題であった。またそのノートは、その質と量において多様なレベルを認めることができる。ある場合には紙切れに記した断片的な覚え書きであり、別の場合には命題類を記した網要的なものである。さらに新約聖書の釈義関係に多い比較的詳細に書き連ねたノート類もある。

これらノート類はある独自の仕方ですシュライエルマッハーの講義と結びついていた。彼の講義のスタイルを仄めかす本人自身の印象的な陳述がある。「教師は語るころのすべてを聴衆の面前で生成しなければならない。教師は知っていることを物語るのはいけない。彼は自らの認識の営み自体を再生産しなければならない。そうすることで聴衆は知識だけを絶えず収集するのではなく、認識を創出する理性的活動を直接に目の当たりにして追形成するのである」¹⁷。シュライエルマッハーは周到に用意され確定したノートを教室に持参して読み上げるというスタイルの講義を行わなかった。しばしば彼は断片的なメモのみを持って教室に赴き、その場でテーマについての思索を自由に展開した。彼の遺稿類にはそのような仕方になされた講義をそれが終わってから記録として短く書き記したメモも含まれる。それゆえに、講義の内容自体の多彩さ、豊かさに比して、彼自身の手になるものは多くの場合骨格以上のものを示してはいない。さらに、そのような講義スタイルから生じることであろうが、シュライエルマッハーが最も適切と判断してその場その場で使用した

用語は、時と場合によって微妙に変容することになる。一般にシュライエルマッハーの思索の特徴として挙げられることであるが、概念の使用については必ずしも厳格ではなく、類似の内容を異なった用語で示すことがしばしば見られた。ビルクナーはこの点を指摘して「シュライエルマッハーにとって事柄の直観を橋渡しすることが重要なのであり、それに対して用語法は相対的にどちらでもかまわないものであった」と記している¹⁸。その結果、講義類を編集する際の資料として聴講者の筆記ノートの存在がきわめて重要なものとなってくる。しかしそれらを参考にする場合、テキストよりもさらに一層注意深い取り扱いが必要となる。

ところで、シュライエルマッハーの講義類のうちで、これらの課題について能う限りの処理を施した決定版と目されるべき KGA 版『弁証法講義』がアルント (Andreas Arndt) の編集によって 2002 年に登場した¹⁹。これを事例にして講義の編集作業の実際とその問題を瞥見したい。もし生前にシュライエルマッハー自身が完成させていたならば彼の哲学的主要著作と見なされるべきこの講義は学一般の成立根拠とその体系的展開を取り扱う科目であり、ベルリン大学の同僚であったヘーゲルの「弁証法」とは異なり、ギリシア以来の語源に忠実に「対話」性を保持した意味合いを持っていた²⁰。この講義は 1811 年 (夏学期) に始まり最後の 1831 年にいたるまで、1814/15 年 (冬学期)、1818/19 年、1822 年、1828 年の合計 6 回なされている。当初の講義は明らかにフィヒテが『知識学』の講義を哲学部で行っていた時代に、アカデミーの「哲学・歴史部門」のメンバーとしての権限を行使して同じ哲学部で行ったものである。これは敢えてフィヒテの講義と同じ時間に当てられフィヒテ以上の聴講者を得たと言われるが、そこにフィヒテの思弁的な知の理解に批判的なシュライエルマッハーの自負を見ることができる²¹。

それはともかく、シュライエルマッハーが精力を傾注した、哲学的、体系的な主要業績と見なされるべき「弁証法」は、シュライエルマッハーの手によって完結して刊行されることはなかった。1834 年の死の直前 (2 月 4 日) になって、シュライエルマッハーは弟子のヨナスに、この「弁証法」を後述する「キリスト教倫理論」と合わせて、元来は『信仰論』と同じように主命題に詳細な解説を付して体系的に全面展開した著作に仕上げようとしていたこと、しかしその希望は実現の見込みがなく、せめて『神学通論』のように体系を構築しているが命題に簡単な注釈を添えたレベルの簡潔な体裁のものならば可能だと見なしていたことを伝えていた。またその序論については実際に印刷の準備を進めていた。しかしそれらの希望は 2 月 6 日より患った肺炎が悪化して 2 月 12 日に不帰の客となることで実現にいたらなかったのである²²。

このような事情の中で「弁証法」は 1839 年にはヨナスによって編集されて SW に

収録された。それは、1814/15年の講義原稿を中心に据え文献学的に綿密な作業を経たものであったが、それ以外の原稿は脚注や補遺に配されており必ずしも読みやすいものではなく、収録されていない原稿もあった。そこで、1878年にはヴァイス (Bruno Weiß) が残された原稿をSWの補遺としての自覚のもとで公にした。さらに読みにくさの軽減を目指して、1901年にハルパーン (Isidor Halpern) は1831年の原稿を最も成熟したものと判断してそれを中心に据え、その欠落部分を他の原稿で埋め合わせたものを刊行した。しかしこれは言わばシュライエルマッハー自身の作成年代を異にする諸原稿を人為的に組み合わせたものであり、資料の編集作業に編者の解釈が大きく入り込んでいた。このハルパーンのテキストは、ブラウン、パウアー編集の4巻本選集に縮められて収録され、この縮められたテキストを収録した選集は1911年から1981年まで4回にわたって再販された結果広く行き渡るようになった。また1942年にはオーデブレヒト (Rudolf Odebrecht) が1822年の原稿を中心に、晩年に作成された「序論」を加え、SWのヨナス版を校訂しつつ全体を形成したものを公刊した。これは1976年、1988年と2度再刊されたが、これもまた読みやすさを求めた編者の解釈作業の産物という面が強い。最近では、1986年と1988年に2巻構成の学習版がKGA版の完成前にその編集者アルントによって出版されている。この第1巻には1811年の講義、第2巻には1814/15年の講義と1833年の、シュライエルマッハーが印刷を念頭に置いて清書した「序論」が掲載されている。さらに2001年にはフランク (Manfred Frank) によって、これもまた学習版としてヨナス版およびオーデブレヒト版に基づいたテキストが編集、出版されている²³。

さて、2002年に2分冊でアルント (Andreas Arndt) によって校訂されて出されたKGA版の『弁証法講義』は、第1部 (第1分冊) にシュライエルマッハー自体の原稿、第2部 (第2分冊) に聴講者の筆記ノートが配されている。第1分冊にはアルントによる詳細な編集報告に88頁。1811年の講義は、断片的覚え書き30頁、第12～40回めの授業時間の梗概39頁、計69頁。1814/15年の講義は、計45の命題に注釈をつけたノート123頁、10片の覚え書き2頁、計125頁。1818/19年の講義は、覚え書き2片1頁、梗概8頁、計9頁。1822年の講義は、各授業時間の詳細な注釈58頁。1828年の講義は注釈37頁。1831年の講義は注釈36頁。これに加えて1928年と1931年の講義を背景にした内容を持つ「序論」の下書き原稿33頁、それを下敷きにし、命題に詳しい解説をつけるという『信仰論』と同じ体裁を持つ「序論」の最初の5節を清書した原稿34頁。シュライエルマッハーのテキストは合計401頁の量を持っている。

第2分冊には、聴講者の筆記ノートが掲載されている。そもそもヨナスはSW版を編集する際に7つの筆記ノートを手元に置いており、そのうち、シュライエルマッ

ハーの原稿の補充に資するもの、またその理解に有益と思われるものをいくらか利用した。現在、そのうちの2つ、ツァンダー (Zander) の1818/19年の筆記ノート、クラムロート (Klamroth) の1822年の筆記ノートが残存している。それ以外の5つは作業終了後に返却されたものと思われる。現存しないもののうち2つの筆記ノートの作成年をヨナスは伝えている。すなわちシュープリング (Schubring) のもの (1822年) とエルプカーム (Erbkam) のもの (1831年) である。オーデブレヒトは彼の編集作業に際してさらに4つの筆記ノートを手元に置いた。そのうちの2つ、クロパチェック (Kropatscheck) のもの (1822年) およびザニール (Sannier) のもの (1822年) は、シュライエルマッハーの遺稿類として現在保管されており、もう一つスツアルピノウスキー (Szarbinowski) のもの (1822年) はゲッティンゲン大学図書館に収蔵されている。残りの1つ、ボン大学図書館に収蔵されていたブルーメ (Bluhme) のもの (1818/19年) は現在では消失している。KGA ではさらに以下の筆記ノート、1811年トヴェステン (August Twesten)、1818/19年ベルンハルディ (Bernhardy)、1818/19年の匿名者によるもの、1822年ボンネル (Bonnell)、1822年ハーゲンバッハ (Hagenbach) のもの、計5点が編集作業に加えられた。その結果、KGA の編集には1811年の筆記ノートが1つ、1818/19年の筆記ノートが3つ、1822年の筆記ノートが6つ取り扱われたことになる。それに対して1814/15年、1828年、1831年の筆記ノートは残存していない。編集にあたっては、複数のノートが存在する1818/19年の講義、1822年の講義は最良と見なされるテキストを利用し必要に応じて他のテキストから抽出したものが注釈に加えられた。その結果KGA の『弁証法講義』では、1811年についてはトヴェステン (106頁)、1818/19年については匿名者 (296頁)、1822年についてはクロパチェック (312頁) の筆記ノートが主要テキストとなった。さらに参考のために1811年のトヴェステンの原稿10頁。これは自らが認めた筆記ノートを整理しようとしたものと見られ、第1～11授業時間まで記されている。そしてシュライエルマッハーの原稿が現存しない学期については、ヨナスのSW版に収録された1828年のシュープリングのノート6頁と1831年のエルプカームのノート72頁が付録として再録され、合計802頁のテキストが読者の判断に委ねられている。

アルントが書簡の編集作業の傍らで続けた『弁証法講義』の作業は準備段階も含めて前後20年に及ぶものであった²⁴。シュライエルマッハーのテキストレベルで課題を残していた弁証法講義は、たとえ、その講義のすべてを網羅することができなかつたにしてもKGAによって今後の研究を決定的に左右する材料が提供されたと言えることができる。

4 KGA とそれにいたる道

シュライエルマッハーの個別テキストの編集はすでに言及したとおりであるが、弁証法神学運動の退潮に伴ってそれは1950年代末頃から再度活発になった。キンメルレ(Heinz Kimmerle)による『解釈学』、ローテルト(Hans-Joachim Rothert)やラツチョウ(Karl-Heinz Ratschow)の『宗教論』第一版の新訂版、オットー版の再刊(1967年)、レーデカーの『信仰論』第二版の校訂版、またショルツの『神学通論』の再版(1961年)、さらにバイターの『キリスト教倫理論講義』の編集などである²⁵。また、SWの欠陥を修正する著作全集編纂の試みもなされてきた。すでに1927年には1934年の没後100年の記念日にその刊行を目指して42名の研究者を集めてムーレルトが新たに全集を企画した²⁶、1961年には教会史家ボルンカム(Heinrich Bornkamm)や哲学者ガーダマー(Han-Georg Gadamer)他がハイデルベルク・アカデミーの枠内で全集編纂を企画した。この企画にはKGAの編纂者であったキンメルレや現在の編纂代表であるヘルマン・フィッシャー(Hermann Fischer)も若手の研究者として参画していた。両者ともに財政的事情他により実現することはなかったが、この気運は1972年のKGA編纂企画に繋がっていくことになった。これにはシュライエルマッハー研究にディルタイやムーレルト以来の伝統を持つキールの研究者、レーデカーやビルクナーが積極的に関与することになった²⁷。

その一人レーデカーは『信仰論』第2版を校訂した学者であるが、1960年代後半にキールでシュライエルマッハー学会と全集編纂の立ち上げを企画し、彼自らの尽力で設立された神学部内の「シュライエルマッハー研究所」で1968年の退職後も活動を続けていた。この事業は1970年に急逝することで途絶えかけたが、彼の教授席に後任として赴任していたハンス・ヨアキム・ビルクナーがそれを継承し、1972年には全集企画に結実することになった。そこにはライマー出版社の後身であるベルリンの出版社、ヴァルター・デ・グレイター(Walder de Gruyter)の後押しがあり、また当時フィヒテ、ヘーゲル、シェリングなどシュライエルマッハーと同時代のドイツにおける古典的哲学者の業績への関心と全集を編纂するという流れにも乗って、その年の12月に、4人の研究者が集まってこの企画は具体的なものとなり、長らく待望されていた新版全集の編纂へ発展することになった²⁸。この新版の編集作業は1975年からキールのシュライエルマッハー研究所で開始され、1979年には(現在はブランデンブルク学術アカデミーに所属する)ベルリンのシュライエルマッハー研究所も加わることになった。当初は、編纂代表のビルクナーの他に、エーベリンク(Gerhard Ebeling)、キンメルレ、フィッシャー、ベルリンの研究所の指導を引き受けたゼルゲ(Kurt-Victor Selge)が5人体制の編纂サークルを構成していた。その後、ビルクナー、エーベリンク、キンメルレが抜け、

現在ではメッケンシュトック（現在、キールの研究所長）、バルト（現在のシュライエルマッハー協会会長）、ゲッティンゲンの哲学者クラマー（Konrad Cramer）が入っている。

この新版全集 KGA は、旧版全集 SW とは異なり、遺稿類を文学類型別に五つの部門に整理した。1) 著作類、2) 講義、3) 説教、4) 翻訳、5) 書簡類である。第 1 部門はキールの研究所が作業を担当している。そこでは公刊された書籍類とそれ以外の部門に組み込みにくい性質を持つ資料類、さらにそれらの理解に資すると思われる関係資料類が取り扱われている。この作業は 2003 年末に完了し、現在では全 14 巻（+ 索引）のすべてが刊行されている。第 5 部門（書簡）はベルリンの研究所が引き受け、書簡と伝記的記録を取り扱っている。1985 年から刊行が始まり、現在 1774 年から 1802 年までのもの計 5 巻が刊行されている。ベルリンでは、1989 年以来第 2 部門（講義）の編集作業も進められている²⁹。まず第 8 巻の『国家論』（W. Jaeschke 編集）が 1998 年に、第 10 巻の『弁証法講義』が 2 分冊で 2002 年に出された。さらに、第 3 部門（説教）の編集作業がキールで 2003 年から始まっている³⁰。

その間に、この全集編纂の事業に付随して 1984 年から『シュライエルマッハー叢書』（Schleiermacher-Archiv）がデ・グレイター出版社より刊行されている。この企画にはシュライエルマッハー研究に有益と思われるたぐいの資料類がモノグラフィとして収録されている。その中には、シュライエルマッハーの「神学諸科解題」の講義を聴いた D・F・シュトラウス（David Friedrich Strauß, 1808 - 1874）のノートを校訂したもの、シュライエルマッハーの著述目録と説教の日時他の情報をまとめたもの、講義リスト、書簡の日時、宛て先他をまとめたもの、蔵書目録などの基礎資料がある。さらに、1984 年にベルリンで没後 150 年を記念して開催された学術大会、1999 年にハレで『宗教論』刊行 200 年を記念して開催された学術大会の報告論文集、さらに最近のシュライエルマッハー研究のモノグラフィなどを含み、目下 20 巻に達している³¹。

5 シュライエルマッハーにおける神学の方法 ビルクナーによる方法論的反省

この新版の全集 KGA の編纂代表として中心的役割を担ったのは先に挙げたキールの組織神学者ビルクナー（1931-1991）であった。キールに赴任した当初には、ビルクナーはシュライエルマッハー研究に特に軸足を置くわけではなかったが、急逝したレーデカーの後任として研究所を引き継いで以来、それを現在のシュライエルマッハー研究のセンターとしての地位に押し上げる役割を担うことになった。ビルクナーは、しかし、そのような職務に功績があったに留まらず、20 世紀後半期以降のシュライエルマッハー研究を規定する方法論的整備をした存在として特筆に値する学者であった。以下にビルク

ナーの業績のいくつかを材料にして方法論的諸問題を扱う。

5.1 概念の適切な処理

1974年に『神学と哲学 シュライエルマッハー解釈の諸問題入門』と題されたビルクナーの小著が出版された。元々1969年にフランス語で発表された論文に基づき、本文がわずか38頁のこの論文は、しかし、今までに言及してきたような特徴を持つシュライエルマッハーのテキストの世界に入るための極めて重要なポイントを指摘している³²。シュライエルマッハーの神学思想についての伝統的な論議は「彼の思想は神学であるのか哲学であるのか」、「それは神学であるのか学一般に解消されるのか」という問題であったが、研究史的に見れば三様の解釈、つまり、「彼の神学は哲学に従属している」、「彼の神学は哲学から独立している」、「彼の神学と哲学は調停的關係に立つ」という三様の解釈を容認してきた。このように異なる多様な対立的解釈が可能になるのは、シュライエルマッハー自身なおこの問題を十分に整理していなかったために、彼のテキスト自体が曖昧さを含んでいるからであるとの受け止め方もなされてきた³³。しかし、テキストが曖昧であるとの判断は重大な問題を孕んでいる。もしシュライエルマッハーのテキストが彼の学問的、神学的モチーフに即して適切に説明されるならば、このような多様な解釈の余地はなくなるはずである。ビルクナーは「神学かあるいは哲学か」という論題一般がシュライエルマッハー自身の遂行した神学と哲学の理解に対応していないことを強調して、彼のテキストの世界に入るために顧慮しなければならない三つの識別点を挙げる。それは、1)研究者の解釈上の概念とシュライエルマッハーの体系上の概念の識別、2)構想した体系と現実に形成されたものとの識別、3)体系に関係する論述とそれに関係しない論述の識別である³⁴。

まず1)であるが、「神学と哲学」という論題は、しばしば(啓示に基づく)神学は(自然的理性の産物である)哲学の優位に立つという立場を前提として論じられてきた。それは、シュライエルマッハーの神学に哲学の匂いを嗅ぎつける人々がシュライエルマッハーに反神学的傾向を見出す背景となってきた。そればかりでなくシュライエルマッハーの神学的モチーフを支持しその側に立つ研究者たちも同様の前提から出発しているという点で、つまり哲学に対する神学の優位性を自覚しているという点で批判者と軌を一にする場合が多い。その場合には、弁証的にシュライエルマッハーの神学は哲学に従属していないという反論的主張へと展開する。しかし、シュライエルマッハー自身の神学と哲学の理解はそれらとは異なる。いずれにしても研究者自身の「神学概念」をシュライエルマッハー神学の体系に重ね合わせることは避けられるべきであり、シュライエルマッハーのテキストは歴史学的文献学的にそ

れに即して読まれ、理解される必要がある³⁵。

次に2)であるが、ドイツ・イデアリズムの時代に生きたシュライエルマッハーにとって、知は全体として相互に関連しあっていること、諸学一般は体系的秩序を持つことは自明の前提であった。しかし、この体系自体は完成された著作の形で残されることはなかった。彼の著作類、また講義類の一つ一つはすべてこの体系の中の一部にしかすぎない。この体系構想を脳裏に刻みつけながらシュライエルマッハーは個々の作業をなしたわけであるが、実際のところそのそれぞれは必ずしも厳密にこの体系構想に従って遂行されたわけではない。彼の著作の読者、講義の聴講者はシュライエルマッハーの学問体系の全体を知りうる立場になかった。そのような人々を念頭に置いてなされた各々の著述、講義はそれ単体でまとまりあるものとして適切に説明されねばならず、説明のための方便として利用された諸用語、諸概念は多様であり、別の著作や講義との横の繋がりという点では脈絡もなく併存しているように見えるのである。背景としての彼の学問の体系性と実際に登場した著述内容および表現の間には異同があることの自覚が必要である³⁶。

最後の3)の体系構想と関連する叙述とそれに関連しない叙述の識別という点は、彼のテキストを読解するに際しての具体的な指摘である。まず個別テキストの世界に前提として横たわるシュライエルマッハーの哲学的な学一般の体系を探究する場合、彼の「弁証法」「哲学的倫理学」のとりわけ序論部分の知識が重要である。また神学の体系を叙述したものとしては『神学通論』が基本文書と言える。この書は同時に学一般との体系的関連をも仄めかしているが、それに対して『信仰論』は体系的構想を自覚的に表現しているわけではない。そこでは一般的な次元で学一般の体系との関連が認められるのみである。『信仰論』理解にとって重要である「リュッケへの回覧書簡」もこれに該当するものとしてビルクナーは挙げている。今後続々と登場するシュライエルマッハーの膨大なテキストを扱う場合、このような識別の視点は常に自覚しておかねばならないことである³⁷。

5.2 神学的・学問的体系

ビルクナーはシュライエルマッハーの「キリスト教倫理論」(神学的倫理学)を分析解明した著作を上記小著以前の1964年にすでに公にしていた。これは教授資格取得論文としてゲッティンゲン大学神学部に1961/62年の冬学期に提出されたものであるが、現在にいたるまでの神学的シュライエルマッハー研究を決定的に方向づけている記念碑的著作とすることができる³⁸。この著作の表題に付された「シュライエルマッハーの哲学的・神学的体系と関連した」という副題が示すように、この研究

はシュライエルマッハーの学問の体系性を明確に自覚したものとなっている。従来のシュライエルマッハーの神学的研究は、個々の作品の持つ魅力によって導かれてきた。たとえば『宗教論』や『信仰論』における宗教理論、敬虔の理論、教会理解他個別テーマに集中することはあっても、シュライエルマッハーの学問全体の中でそれらの理論がどのような位置を占めているのかについて、明確な判断があったわけではない。しかし、ビルクナーがこの著作で迫ったのは原理的な方法論的反省であった。この著作は、序論に加えて三つの章によって形成されている。まず第1章は、シュライエルマッハーの学問の体系をテーマとする。そこでは、「弁証法」そして思弁的な精神科学一般を束ねる「哲学的倫理学」(philosophische Ethik)を利用して、学問各分野の体系的配置を案内する。さらに、神学プロパーの学問理解に言及して、教義(神)学に所属するものとして「キリスト教倫理論」を位置付ける。第2章では、『神学通論』に依拠してこの「キリスト教信仰論」(Christliche Glaubenslehre)と「キリスト教倫理論」(Christliche Sittenlehre)を包摂する教義神学が神学全体に占める位置について案内する。第3章になって、ようやく「キリスト教倫理論」自体の内容が扱われ、「教会」「家族・結婚」「国家と文化」が叙述の主題となる。つまりビルクナーの主眼点の一つは、シュライエルマッハーの「キリスト教倫理論」がシュライエルマッハー神学全体の中に占める位置、ならびにキリスト教倫理論を含む神学的学科が哲学すなわち学一般と関係する構造に注意を促すことにあった。

さてシュライエルマッハーは「弁証法」において知(Wissen)の本質をめぐる理論、知を省察して学(Wissenschaft)へと展開する理論の構築を企てた。この知をめぐる理論は、彼がフィヒテやヘーゲルなどと同じくドイツ・イデアリズムの世界に生きた人であることを示すと同時に彼独自の特徴を表現している。シュライエルマッハーによれば、すでに知はこの世界に与えられている。しかしその世界に与えられた知は考察する側である我々にとってはなお混沌とした状態に留まっている。学は、その混沌とした知を適切な仕方で整序して、個別にその知を把握するものとして成立する。この学は、古典的な伝統に従って、論理学、自然学、倫理学に整理されている。弁証法は、この論理学にあたり、知自体とその学の体系を整備する原理論である³⁹。これによれば、知のあり方はいわゆる自然系の学と歴史的人間的な生を対象にする倫理系の学に分けられる。この自然系と倫理系の分類を縦系列とすれば、横系列として両者を横断する形で思弁的観想的な学と経験的歴史的な学とに分類される。そうして自然系は、理論的物理学と経験的自然学に分けられ、倫理系は、(哲学的)倫理学と経験的歴史学に分けられ、四領域構成になる。シュライエルマッハーは、これをもって分類を終えず、なお倫理系の学に哲学的倫理学と経験的歴史学を調停する二つの分野を設定する。一つは、経験的歴史学から得られた知見を哲学

的倫理学に関係づけるものであり、「批判的学科」(kritische Disziplin)と表現される。たとえば、文法学はこれに属し、現実に入々の間で話され、経験的、習慣的に形成されたルールの中で営まれている言語行為を土台にしつつ、いわばメタ批判としての哲学的倫理学に関係付けて、その原理を明らかにしようとする。ちなみに『信仰論』序論には、「宗教哲学」からの借用命題として諸宗教を分類する叙述があるが、この宗教哲学もまたこの分野に該当する。それは歴史的諸宗教の実証的探究であり、その探究の成果を歴史原理の学としての哲学的倫理学に提供する。それに対して、「技巧的学科」(technische Disziplin)と命名されて、思弁的原理的な作業から得られた視点を現実の歴史的に適用する分野がある。たとえば教育学は、人間本性の原理的な探究に基づいて形成された教育理論を実践的に現実の教育の営みに差し向け、現場の混沌とした事態に光を投げかける役割を担う。神学の部門で言えば、実践的神学がそれに該当する。こうしたシュライエルマッハーの学問四領域は相互作用の中で関係しあうが、とりわけ歴史的倫理的領域を扱う倫理系の思弁的観想的な学と経験的歴史的な学の領域は両者を媒介する批判的、技巧的な二つの学科の応援を得て決して孤立した作業にはならない。そもそも彼の弁証法理論は、同じ用語を使用するヘーゲルとは異なり、命題と反対命題の対立からそれを克服する総合命題を導出するものではない。シュライエルマッハーにとって、知をめぐる、また学をめぐる作業は一つの原理に導かれて体系を作り出していくあり方とは無縁であり、二つの命題が常に対話関係にあって、その時々で学的良識の中で適切な決定を図っているものである。それは状況に応じて常に改良可能でありまたされるべきものである。知それ自体の絶対性は別にして、学が持つ人間的営みという歴史的制約の中での作業は常に実存的揺らぎの中にあるのであり、この事態を原理的に承認した上でのたゆみない向上の営みとしてシュライエルマッハーは学を構想したのである。

次にキリスト教倫理学が神学体系に占める位置であるが、通例、公刊された主著(キリスト教)『信仰論』に光があたり「キリスト教倫理論」は目立たない存在であった。この『信仰論』は伝統的教義学の内容をキリスト教的敬虔の意識の記述として体系的に洗練された仕方で再構築したものであり、それはシュライエルマッハーの教義学、組織神学的作業の結実であるとして注目を集め、単体でそれ以降の神学に重大な影響を及ぼしてきた。しかし、この『信仰論』自体の規定に従えばキリスト教は倫理的目的論的一神教に分類される宗教の形態である⁴⁰。そしてキリスト教「信仰論」ではキリスト教的敬虔の静的な側面が考察され、「キリスト教倫理論」ではその動的な側面が叙述され、両者相まって初めてキリスト教信仰の全体を的確に表現することができる⁴¹。要するにこの「キリスト教倫理論」を顧慮することなしには、彼の信仰理論の全体、つまり彼の教義神学の構想を包括的に取り扱うことはで

きないのである。この「キリスト教倫理論」もまた完成することはなかったが、シュライエルマッハーが生涯の最後にいたるまで、形をなすことに精力を傾注したことはよく首肯しうるのである。

ところで『神学通論』は神学を、哲学的神学、歴史的神学、実践的神学と三つの部門に分けている。この神学体系の中で「キリスト教信仰論」と「キリスト教倫理論」は「歴史的神学」に所属する「教義神学」の二本柱である。驚くべきことであるが、この大がかりな神学体系の構想から見れば、彼の主著『信仰論』あるいは力を注いだ「キリスト教倫理論」は神学の三部門の中の一つである「歴史的神学」の中のさらに細分された一部門としての教義神学にその場を有しているにすぎないのである⁴²。

ちなみに、『信仰論』序論には、先に言及した宗教哲学に関連するテーマを扱った箇所の直前に「倫理学からの借用命題」として、敬虔についての有名な定義、その本質は直接的自己意識、感情の様態であり、神関係の意識として絶対依存意識であるという定義がある。教義学的著作である『信仰論』は『神学通論』に従えば歴史的神学に属している。しかし、その序論の部分、教義学本体ではないいわゆるプロレゴメナは、この『神学通論』での分類と対照させれば、思弁的観想的な学としての哲学的倫理学および批判的学科に関係づけられる哲学的神学に属するのである。なぜならば、序論には「倫理学からの借用命題」および「宗教哲学からの借用命題」が含まれているからである⁴³。

この神学という学問は「弁証法」「哲学的倫理学」が示した諸学問分野のどこかにそれとして存在するのではない。しかし、神学は諸学問の世界の対岸に隔たりをもって存在する彼岸の世界のように啓示の学として孤立して営まれるわけではない。それは啓示をめぐる営みについて世俗の学を道具として成り立つ学であり、神学は独自に諸学と連携する中に構築されている。この意味でシュライエルマッハーの理解における啓示は神学自体の中にあるのではなく、イエス・キリストにおいて露わになった神の恵みを受け入れるキリスト教信仰自体の中に、キリスト教信仰共同体の営みの中に、さらに言えばこの世界の中にすでに存在している。伝統的に啓示と表現されているものは歴史的存在である我々人間の信仰の経験、すなわち敬虔という事態に現象しており、この敬虔を刺激するものとしてのこの世界に現象している。これを的確に把握し、批判的な作業の俎上に載せる学としての教義学は、その対象を歴史的世界に持つがゆえに歴史的神学に所属して、この領域に特有の方法を援用する学なのである。

ビルクナーの功績は、このようなシュライエルマッハー神学の体系的構想を原理的に明らかにし、それを踏まえた上で個別の神学的学科である「キリスト教倫理論」の解明を志した点にある。個別と全体は関連している。この視点から言えば、『信仰

論』もそれ単体として読むことはできるにしても、それは「キリスト教倫理論」と関係し、両者相俟ってキリスト教組織神学全体の叙述があることが自覚されるべきなのである。

結 び

以上、シュライエルマッハーのテキストの問題と現在のシュライエルマッハー神学の研究の礎石を築いたビルクナーの業績を瞥見してきた。18世紀以来、近代の歴史的、実証的学問の影響のもとで、神学は伝統と近代との緊張を孕みながらその諸学科に種々の方法を探り入れ、枝分かれして発展してきた。このように、神学の諸学科が近代的諸学と連携していく中で、組織神学は、いわば中世の自然神学と啓示神学との関係のように質的差異を守り続け、ある場合には、伝統的な信仰財の保存とその表現に精力を傾け、キリスト教信仰を現代世界の諸問題を見据えて表現しなおす試みを続けてきた。しかしこの試みは同時に単なる発想の宝庫に留まり、ハルナックに残された逸話、教義学は「麗しい文芸作品」だという判断に見られるように⁴⁴、諸学の成果を享受する際の方法論的な吟味を棚上げにしてきたとも言える。同時に、これらの成果を摂取する営みの中で、キリスト教の知的学問的反省としての組織神学的作業は焦点を失い、個別の成果の単なる集合体に化している感もなきにしもあらずである。神学をキリスト教宗教とそれをめぐる周辺環境およびその諸問題の総合的研究として、歴史的外在的、思弁的内在的両面から、その相互連関、統合を自覚しつつ営まれたシュライエルマッハーの神学の構想とそこに現れた彼の厳格な方法論的自覚が我々に投げかけている課題は意味深重と言えるのである。

注

- 1 トレルチの誕生日である2月17日に出生地であるアウクスブルク近郊のHaunstettenで設立された。事務局他は、<http://www.evtheol.uni-muenchen.de/st1/>参照。
- 2 Zeitschrift für neuere Theologiegeschichte / Journal for the History of Modern Theology. 編集者はRichard E. Crouter, Friedrich Wilhelm Graf, Günter Meckenstock.
- 3 Schleiermacher-Gesellschaft/Schleiermacher Society. 事務局はMartin Luther Universität Halle-Wittenbergのホームページ <http://anu.theologie.uni-halle.de/ST/SF/SG> 参照。

- 4 1. Internationaler Kongreß der Schleiermacher-Gesellschaft (14. bis 17. März 1999 in Halle / Saale). この学会での講演や個別研究の報告は2000年に45の論文を収めた1000頁にのぼる大冊として刊行された。なお、国際的規模の学術大会としては、シュライエルマッハーの歿後150年を記念して、すでに1984年にベルリンで開催されている。これらは『シュライエルマッハー叢書』(Schleiermacher-Archiv)の中に収録されている。「シュライエルマッハーの個性性概念とその現代的意義」『基督教研究』第64巻第2号(2002) 101頁および107頁以下参照。さらに2003年10月9-13日にはコペンハーゲンでキルケゴール協会と共催の第2回の学術大会が開催された。
- 5 副会長にはコペンハーゲンのテオドア・イェルゲンセン(Theodor Jørgensen, 組織神学)、会計にはベルリンのヴィルヘルム・グレーブ(Wilhelm Gräb, 実践神学)、書記にケルンのウルズラ・フロスト(Ursula Frost, 教育学・哲学)が就任した。なお10名の評議員のうちの一人は関西学院大学の高森昭(名誉)教授である。
- 6 Schleiermacher-Forschungsstelle an der theologischen Fakultät, Christian-Albrechts-Universität zu Kiel.
- 7 Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher Kritische Gesamtausgabe, 1. Abt. Schriften und Entwürfe, 7. Bd. Der christliche Glaube 1821-1822, Teilband 3 Marginalien und Anhang, Berlin/New York 1984. 以下表記をKGA, I/7/3, 1984 というようにする(1. Abteilung はIとラテン数字を使う)。
- 8 KGA, I/1-2, 1984. 第一巻は1787年から1796年までの遺稿19点、第二巻は1796年から1799年までに印刷された『宗教論』や『アテネウム』(Athenaeum)他に掲載されたもの以外に8点の遺稿を収録している。そのうちの1点「思想III」は1801年に及んで執筆されたものである。
- 9 デイルタイの『シュライエルマッハーの生涯』(Leben Schleiermachers)に付された資料は「シュライエルマッハーの内的発展の碑」と題されている(Denkmale der inneren Entwicklung Schleiermachers, erläutert durch kritische Untersuchungen)。これについての批評は以下の論文を参照。Meckenstock, Diltheys Edition der Scheiermacherschen Jugendschriften, in: Internationaler Schleiermacher Kongreß Berlin 1984, Schleiermacher-Archiv Bd. 1 Teilband 2, Berlin/New York 1985, S. 1229-1242.
- 10 シュライエルマッハーは1834年2月12日に亡くなったが、その数カ月後、同年の6月2日にライマーは完全な著作集を刊行することを告知している。Friedrich Schleiermacher's Sämtliche Werke, Berlin - 1835ff. **なお、SWについては、**H.-J. Birkner, Die Kritische Schleiermacher-Ausgabe zusammen mit ihren Vorläufern vorgestellt, 1989(以下Schleiermacher-Ausgabeと略); Die Schleiermacher-Gesamtausgabe. Ein Editionsunternehmen der Schleiermacher-Fortschungsstellen Berlin und Kiel, 1991, in: Scheiermacher-Studien, Berlin/New York 1996, S.309-344 参照。
- 11 シュライエルマッハーはこの出版社ライマーから、生前に『信仰論』などの著作を刊行している。それらの在庫は全集に組み込まれて刊行されたが、全集としての巻数の明示がないままであったという。Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S.312 参照。
- 12 以下に掲げるSWの特徴については、Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S.314ff.参照。
- 13 Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern は初版は1799年、第2版は1806年に、第3版は1821年に、さらに1831年に第4版が出版された。

- 14 Aus Schleiermacher's Leben. In Briefen, 4 Bde. 1858年に出版された最初の2巻の編者名の記載はなかったが、その後判明したところではシュライエルマッハーの娘 Hildegard Gräfin Schwerin と義理の息子 Ehrenfried von Willich である。Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S.315 参照。
- 15 W. Pannenberg, Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich, Göttingen 1997, S. 47.
- 16 Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S. 326.
- 17 Gelegentliche Gedanken über Universitäten im deutschen Sinn, 1808, in: Werke in vier Bänden, hrsg. von Otto Braun/Johannes Bauer, 4. Bd., 1911, S.573.
- 18 H.-J.Birkner, Schleiermachers Christliche Sittenlehre. Im Zusammenhang seines philosophisch-theologischen Systems, Berlin 1964, S.19. (以下 Sittenlehre と略)
- 19 KGA, II/10/1-2, Vorlesungen über die Dialektik, hrsg. von Andreas Arndt, Berlin/New York 2002.
- 20 KGA, II/10/1, XVIII 以下、さらに Friedrich Schleiermacher Dialektik, hrsg. und eingeleitet von Manfred Frank, 1. Bd., S.14f. 参照。
- 21 KGA, II/10/1, IX; XXIVff., さらに Frank, 同書, S. 13 参照。シュライエルマッハーの講義は、医学部以外の講義で最多の聴講者を集めたという。
- 22 Birkner, Sittenlehre, S.14 参照。
- 23 シュライエルマッハーの学問論を把握する上で重要な「哲学的倫理」の講義の内容については、このテーマでなされたアカデミーでの講演原稿も残っており、比較的処理しやすいと言われてきた。SW に掲載された後に、1910-1913 年にかけて刊行されたブラウンとパウアー編集による4巻本のシュライエルマッハー選集にまとめられ、この校訂版の評価は高かった。
- 24 KGA, II/10/1, LXXXVII 参照。
- 25 Über die Religion, hrsg. von Hans-Joachim Rothert, Hamburg 1958; Hermeneutik, hrsg. von Heinz Kimmerle, Heidelberg 1959; Der Christliche Glaube, hrsg. von Martin Redeker, Berlin 1960. Kurze Darstellung des theologischen Studiums, hrsg. von H.Scholz, 1910 の再版, 1961; Über die Religion, hrsg. von Carl Heinz Ratschow, Stuttgart(Reclam) 1969; Christliche Sittenlehre. Einleitung, hrsg. von H. Peiter, Stuttgart 1983.
- 26 42名の著名な学者の中には、ハルナック(Adolf von Harnack) カッテンブツシュ(Ferdinand Kattenbusch) ノール(Herman Nohl) シューベルト(Hans von Schubert) ゼーベルク(Reinhold Seeberg) ゼーデルブロム(Nathan Söderblom) そしてティリッヒ(Paul Tillich) などの名前が見られる。Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S.332ff. 参照。
- 27 注10におけるビルクナーの論文以外に、G. Meckenstock, Tracing the Development of the Schleiermacher Critical Edition(KGA), ZNThG, 4. Bd.,1997, pp.169-176 参照。
- 28 Birkner, Schleiermacher-Ausgabe, S.320.
- 29 『国家論』の編集報告によれば、第2部門は17巻の構成である。それぞれの講義テーマを以下に挙げておく。1.哲学的倫理学、2.神学諸科解題、3.キリスト教信仰論、4.解釈学、5.キリスト教倫理学、6.教

- 会史、7.ギリシア哲学史、8.国家論、9.キリスト教哲学史、10.弁証法、11.実践神学、12.教育学、13.心理学、14.美学、15.イエスの生涯、16.教会地理学と統計学、17.新約聖書入門。これに加えて釈義関係の講義があるが、ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーに保管されている資料は膨大であり、その整理編集は今後の課題とされている。KGA, II/8, hrsg. von Walter Jaeschke, 1998, VIII f. 参照。
- 30 KGA 第一部門の著作類および手稿についての編集原則は、I/1(1983), IX 以下に記載されている。書簡の編集原則はV/1(1985), XVIII 以下に、講義の編集原則はII/8(1998), IX 以下に記載されている。
- 31 http://www.degruyter.de/rs/ser_d.cfm?rc=16117 参照。
- 32 Theologie und Philosophie. Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation, München 1974. これは1969年に Philosophie et Theologie chez Schleiermacher という題で Archives de Philosophie に収録されたものである。
- 33 同上、S.13-18 参照。
- 34 同上、S.18 参照。
- 35 同上、S.19 以下参照。
- 36 同上、S.20 以下参照。
- 37 同上、S.21 以下参照。
- 38 Hans-Joachim Birkner, Schleiermachers christliche Sittenlehre. Im Zusammenhang seines philosophisch-theologischen Systems, Berlin 1964.
- ビルクナーの評価についてはたとえば Martin Rössler/Matthias Wolfes, Hans-Joachim Birkner, in: http://www.bautz.de/bbkl/b/birkner_h_.shtml; Wilhelm Gräb, Kirche als Gestaltungsaufgabe. Friedrich Schleiermachers Verständnis der Praktischen Theologie, in: Schleiermacher und die wissenschaftliche Kultur des Christentums, Berlin/New York 1991, hrsg. von Günter Meckenstock/Joachim Ringleben, S.149; Hermann Fischer, Einleitung des Herausgebers, in: Schleiermacher-Studien, Berlin/New York 1996, IX などを参照。
- 39 Birkner, Sittenlehre, S.30 以下、Hermann Fischer, Friedrich Schleiermacher, München 2001, S.75 以下参照。
- 40 Glaubenslehre, 2. Aufl. hrsg. von M. Redeker, 1960, S.61 参照。第9命題の解説で、彼は目的論的方向を持つキリスト教的敬虔について、それは道徳的課題との関係が優勢な敬虔な情緒状態を基本型とすると述べる。
- 41 Glaubenslehre, 2. Aufl. S.147 参照。
- 42 Kurze Darstellung des theologischen Studiums, 2. Aufl., Leitsatz 196-231 参照。ただし、キリスト教倫理論の取り扱いはずしもキリスト教信仰論とバランスよく配置されているわけではない。
- 43 Der christliche Glaube, 2. Aufl., Leitsatz 3-10 参照。
- 44 W.Trillhaas, Dogmatik, 3. Aufl., Berlin/New York 1980, S.3ff.; Einführung in das Studium der evangelischen Theologie, hrsg. von E. Schröer, Gütersloh 1982, S.116 参照。